Tsukuba Psychological Research
2010, **40**, 61-71

お金に対する態度に関する心理学的研究の動向

筑波大学大学院人間総合科学研究科　渡辺　伸子

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系　佐藤　有耕

A review of psychological studies on attitudes towards money

Nobuko Watanabe (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)
Yuhkoh Satoh (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purposes of this paper are to review research about attitudes towards money in term of (1) scales of attitudes towards money, (2) the effects of attitudes towards money on behavior, and (3) the factors that determine attitudes towards money. The concept of "attitudes towards money" has multi-dimentional aspects that are characterized by individual differences in cognition, behavior and emotions related to money. First, we classify the subscales of existing scales according to three dimensions: cognitive, behavioral and emotional dimensions. However, some of subscales cannot be classified according to these dimensions because they involve ambiguous concepts or concepts that are unrelated to money. Second, we introduce some variables related to attitudes towards money. Within the work place, attitudes towards money are related to having a job and accepting unethical behaviors, while within the retail sector, attitudes towards money are related to maladaptive shopping behaviors. Third, we survey some variables that determine attitudes towards money, such as competition, Machiavellianism, Maslow's hierarchy of needs, religion and thinking. In conclusion, we highlight the need to develop a scale consisting of well-defined factors and to conduct studies that focus on individual differences.

Key words: attitudes towards money, individual differences, job, retail

はじめに

私たちは普段，お金を使って生活を営んでいる。たとえば，お金を払って物やサービスを得たり，値段によって物の価値を比べたりする。また，将来に備えてお金を使わないでおくという選択をすることもある。

このようにお金は，交換可能性が高い（一般的交換手段），価値の基準として利用することができる（価値尺度手段），長期間の貯蔵が可能である（価値貯蔵手段）などの特徴を備えていることが広く知られている（たとえば，片平，2003；林，2008）。

心理学においては，お金と関わる行動や感情，そして認知の個人差という観点からの研究が盛んである。本稿では，そのようなお金に関する心理学的研究の中でも特に，お金に対する態度の研究を中心に概観していくこととする。以下，お金に対する態度の定義および尺度研究，お金に対する態度と関連のある変数，お金に対する態度の規定因の順に研究を紹介したのち，日本における周辺的な研究を紹介し，今後の課題と展望について述べる。

お金に対する態度の定義と尺度研究

はじめに，お金に対する態度の定義および尺度について紹介する。

定義

お金に対する態度，ないしは意識や行動の個人差は，「お金への態度（money attitudes; Yamauchi & Templer, 1982）」，「お金の意味（meaning of money; Tang, 1992: money meaning; Rose & Orr, 2007）」，「お金に対する信念と行動（money beliefs and behaviour; Furnham, 1984）」などと呼ばれている。研究者によって呼称は異なるが，その意味するところに顕著な差はなく，お金に対する評価やイメージ，お金の使い方の傾向，お金に関係する喜びや不安などを総称しているといえる。本稿ではお金に対する意味の捉え方の個人差および，それによる行動や情動傾向の個人差など，より広い概念を総称する用語として「お金に対する態度」という言葉を用いる。

先行研究を鑑みても，お金に対する態度が複数の側面からなるものであることは明らかである。そこで，本稿ではTang（1993）に倣い，お金に対する態度を「認知的側面」「行動的側面」「感情的側面」の3側面から整理する。認知的側面には，お金をどのようなものと捉えているかといった認知的な項目で構成される下位尺度が，行動的側面には，お金を使って具体的にどのように振る舞うかといった項目で構成される下位尺度が，感情的側面には，お金に関連してどのような気分や情動が生じるかといった項目で構成される下位尺度が，それぞれ分類される。また，これらの中のいずれにも分類できないものについては，分類できない理由として「側面の混在」と「お金に直接関係しない」の2種類を設定し，分類できない理由を明確にする。「お金に直接関係しない」とは，お金には関連するが，直接的にはお金と関係のない事柄を表わしていると考えられる下位尺度のことを指す。なお，お金に対する態度の要素をより詳細に限定したい場合には，「お金に対する感情」などという表現を適宜用いる。

尺度研究

お金に対する態度を測定する尺度は，複数作成されている。特に広く利用されるものには，Yamauchi & Templer（1982）によるMoney Attitudes Scale（以下，MAS），Furnham（1984）によるMoney Beliefs and Behaviour Scale（以下，MBBS），Tang（1992）によるMoney Ethic Scale（以下，MES）などがある。他にも，これらを参考に，様々な尺度が作成されている。多くの尺度が，前述のように，認知的側面，行動的側面，感情的側面に該当する下位尺度を有している。それらを表にまとめたものがTable 1である。以下，作成された年代に沿って，尺度を紹介していく。

まず，MAS（Yamauchi & Templer, 1982）は，4下位尺度29項目の尺度である。因子分析では5因子が得られたが，そのうち1因子を採用せず，4下位尺度から構成される尺度となった。他者に対して自分を印象づけるようなお金の使い方をするという内容の項目から構成される「勢力・名声」（9項目），将来のためにお金を蓄えたり普段から無駄遣いしないように気をつけているといった内容の項目から構成される「保存・時間」（7項目），お金を使うことに対する不信感や不快感を表す内容の項目から構成される「不信」（7項目），そしてお金を不安の原因と考えていたり，逆にお金を不安からの保護要因と考えているという内容の項目から構成される「不安」（6項目）である。なお，不信下位尺度の命名には疑問が呈されており，Roberts & Jones（2001）は「価格への敏感さ」という呼び方を用いている。MASでは，下位尺度のうち，保存・時間と勢力・名声が行動的側面として，不安は感情的側面として捉えることが可能である。不信はお金そのものではなく物の値段に対する認知であるので，お金に直接関係しないものと考えられる。MASには，認知的側面に該当すると思われる下位尺度はない。

MBBS（Furnham, 1984）は，6下位尺度51項目の尺度である。項目は，MASなどの先行研究を参考にして作成された。「強迫性」（18項目）は，お金のことを強く信頼して，お金がなくなることを心配する感情を表す下位尺度とされている。「勢力・使用」（8項目）は，他者に自分を印象づけるためにお金を使うといった項目で構成されている。この下位尺度は，MASの下位尺度の勢力・名声とよく似た内容の因子といえるであろう。「保存」（6項目）は，浪費をしないといった項目で構成されており，これもMASの下位尺度の保存・時間とよく似た内容といえるであろう。「安心・保守的」（8項目）は，お金に対して伝統的な態度であることを表す項目から構成されている。「不足」（7項目）は，お金を十分に持っていないと感じているといった項目で構成されている。「努力・能力」（4項目）は，給料はその人の能力を表しているという信念を表す項目から構成されている。MBBSの下位尺度では，努力・能力は認知的側面として，勢力・使用は行動的側面として，強迫性は感情的側面として，分類することができよう。また，保存下位尺度は，お金に関連しているが内容が複数の概念に関連するために分類で

Table 1　先行研究におけるお金に対する態度の尺度の概要

製作者（発表年）	Yamauchi & Templer (1982)	Furnham (1984)	Baker & Hagedorn (2008)	Tang (1992)	Tang & Chiu (2003)	Lim & Teo (1997)	Rose & Orr (2007)	原岡（1990）
尺度名	Money Attitude Scale	Money Beliefs and Behaviour Scale	YTF scale	Money Ethic Scale	Love of Money Scale	–	Symbolic Meanings of Money Scale	お金に対する態度尺度
認知的側面		努力・能力 (Effort/Ability)		達成 (Achievement) 尊敬・自尊心 (Respect-Self-esteem) 自由・勢力 (Freedom-Power) 善 (Good) 悪 (Evil)	成功 (Success) 動機づけ (Motivator) 重要性 (Importance)	勢力 (Power) 達成 (Achievement) 強迫性 (Obsession)	達成 (Achievement)	お金の社会的価値 社会における諸悪の根源
行動的側面	保存・時間 (Retention-Time) 勢力・名声 (Power-Prestige)	勢力・使用 (Power/Spending)	計画・節約 (Planning-Saving) 勢力・名声 (Power-Prestige)	節約 (Budget)		節約 (Budget) 不寛容 (Non-generous)	社会的地位 (Status)	
感情的側面	不安 (Anxiety)	強迫性 (Obsession)	不安 (Anxiety)			不安 (Anxiety)	心配 (Worry) 安心 (Security)	金儲けと使用の楽しみ
複数の側面が混在している		保存 (Retention)	倹約・不信 (Frugality-Distrust)			保存 (Retention)		
お金に直接関係しない	不信 (Distrust)	安心・保守的 (Security/Conservative) 不足 (Inadequate)			裕福 (Rich)	評価 (Evaluation)		社会や人生を狂わせるマネーゲーム お金の使い方と人生の意義 お金の利用と処世術
下位尺度数（項目数）	4（29）	6（51）	4（40）	6（30）	4（17）	8（34）	4（19）	6（53）
作成国	アメリカ	イギリス	カナダ	アメリカ	香港	シンガポール	アメリカ	日本

きないと考えられ，安心・保守的と不足はお金そのものに関係ないと考えられる。MBBS については，α 係数が低く，尺度としての使用には限界があるといった指摘もある（Roberts & Jones, 2001）。

MAS と MBBS については，Baker & Hagedorn (2008) が構造研究を行っている。論文の発表年は 2008 年であるが，調査は 1988 年に行われているため，ここで紹介する。Baker & Hagedorn (2008) は，カナダにおいてランダムサンプリングを用いて 200 人の調査協力者を募り，MAS と MBBS を実施した。その結果，MAS は因子の再現性が比較的高く，α 係数も高いことが示されたが，MBBS は再現性が低く，α 係数も低いことが明らかになった。さらに，Baker & Hagedorn (2008) は MAS の項目と MBBS の項目をあわせて因子分析を行い，新たな尺度を作成している。MAS の作成者 Yamauchi & Templer と MBBS の作成者 Furnham のイニシャルをとって YTF scale と命名されたこの尺度では，「勢力・名声」(11 項目)，「倹約・不信」(11 項目)，「計画・節約」(10 項目)，「不安」(8 項目) の 4 下位尺度 40 項目が得られている。YTF scale では，下位尺度の中の計画・節約と勢力・名声が行動的側面に分類できる。また，不安が感情的側面に分類できる。倹約・不信には，各側面の項目が混在していた。

MAS や MBBS が後述のように消費との関連で使用されることが多いのに対し，就業との関連で使用されることが多いのが MES (Tang, 1992) である。MES はその特徴として，より倫理的な面に注目していることが指摘されている (Mitchell & Mickel, 1999)。MES は 6 下位尺度 30 項目の尺度である。「善」(9 項目) は，お金に対するポジティブな認知を表す内容の項目から構成されている。「悪」(6 項目) は，お金に対するネガティブな認知を表す内容の項目から構成されている。「達成」(4 項目) は，お金を成功や達成のしるしと考える傾向を表す内容の項目から構成されている。「尊敬・自尊心」(4 項目) は，お金が自分の評価につながっていると考える傾向を表す内容の項目から構成されている。「節約」(3 項目) は，お金の管理をしっかり行う傾向を示している。「自由・勢力」(4 項目) は，お金が自由や勢

力，安心を与えてくれると考える傾向を示している。Tang（1993）は6つの下位尺度を各側面に分類しており，善と悪が感情的側面，達成と尊敬・自尊心，自由・勢力が認知的側面，節約が行動的側面であるとしている。しかし，項目を参照すると，善と悪は感情的側面に分類されるよりも，認知的側面に分類されるべき内容であると考えられたため，本稿では善と悪を認知的側面に分類する。その他の下位尺度についてはTang（1993）に準じた。MESはその後，Tang（1995）によって12項目の短縮版が作成されている。

さらに，MESを基にして，Love of Money Scale（LOM）が作成されている（Tang & Chiu, 2003）。LOMは，お金を動機づけの要因とし，お金を成功の象徴とみなし，裕福になりたいと考える傾向を測定している。下位尺度は，お金は大切でよいものだという信念を表す「重要性」（5項目），お金を成功や達成のあかしと考える程度を表す「成功」（4項目），お金によって仕事への動機づけを増す傾向を表す「動機づけ」（4項目），お金持ちになりたい気持ちを表す「裕福」（4項目）の4つである。LOMの下位尺度の中では，成功，動機づけ，重要性が認知的側面に分類されるものと考えられる。裕福に関しては，お金に直接関係する内容とは考えられないため，そのように分類した。このようにLOMは認知的側面に特化した尺度であると考えられる。

Lim & Teo（1997）も尺度を作成している。MAS，MBBS，MESを参考にした項目を用いてシンガポールの大学生に調査を実施し，因子分析を行った結果，34項目から8下位尺度が得られた。お金のことを気にしている程度の強さを表す「強迫性」（7項目），お金を力の象徴とみなすことを表す「勢力」（5項目），貯蓄行動や貯蓄能力を表す「節約」（5項目），お金を成功の象徴と考えたり給料を能力の反映と考える程度を示す「達成」（4項目），お金を他者との比較に用いる程度を表す「評価」（3項目），お金に対する心配を表す「不安」（4項目），お金を使うことに関する慎重さを表す「保存」（3項目），お金を貸したり募金したりしない程度を表す「不寛容」（3項目）である。妥当性の検討が不十分であることや，下位尺度のα係数が.86～.60と低い部分があることが短所となっている。Lim & Teo（1997）では，下位尺度の勢力，達成，強迫性を認知的側面に分類することができる。また，節約と不寛容は行動的側面に分類することができる。不安は感情的側面に分類することができる。保存は複数の側面に関連する項目を含んでいる下位尺度である。また，評価は，他者と比べて自分はお金を持っていないといった項目により構成されており，お金には直接関係のないものと考えられる。

Rose & Orr（2007）は，先行研究にあたるMAS，MBBS，MESは信頼性と妥当性が不十分であるとして，4下位尺度19項目のSymbolic Meanings of Money Scaleを作成している。「心配」（5項目）は，お金に関する心配をしやすく，お金を不安をもたらすものと考える傾向を測定している。「社会的地位」（4項目）は，お金を社会的地位の象徴と考え，他者に自分を印象づけるような行動をとる傾向を測定している。「達成」（5項目）は，お金を成功の象徴と捉える傾向を測定している。「安心」（5項目）は，お金を安心をもたらすものと考える傾向を測定している。この尺度では，達成を認知的側面，社会的地位を行動的側面，心配と安心を感情的側面に分類することができる。

日本においては，原岡（1990）によって，6下位尺度53項目のお金に対する態度尺度が作成されている。第1因子（19項目）は，「お金の社会的価値」と命名されており，「たいていのことはお金で解決できる（項目8）」「お金が現代社会の仕組みを支えている（項目22）」といったお金のよいイメージに関する項目により構成されている。第2因子（9項目）は「社会における諸悪の根源」と命名されており，「世の中に不公平があるのはお金があるためである（項目21）」「理想社会を確立するには，貨幣制度の廃止が前提条件である（項目79）」といったお金の悪いイメージに関する項目により構成されている。第3因子（7項目）は「社会や人生を狂わせるマネーゲーム」と命名されており，「財テク・マネーゲームは経済の活性化に必要なことである（項目27）」「マネーゲームのようにお金がお金を産むという機構は本来間違っている（項目48）」といった，お金そのものではなく，お金を取り巻く社会構造に関する項目により構成されている。第4因子（7項目）は，「お金の使い方と人生の意義」と命名されており，「目先のためだけにお金を使うのはよくない（項目30）」「お金に対する態度はその人の人間性を反映するものである（項目61）」といったお金の使い方に関する規範を表す項目により構成されており，この下位尺度も直接お金に関係しているとはいいがたい。第5因子（6項目）は「金儲けと使用の楽しみ」と命名されており，「人は誰しも限られた財産をどうしたら増やせるか考えている（項目56）」「贈り物は品物よりお金でもらう方がうれしい（項目68）」といった，お金が手に入ったときに生じるポジティブな感情に関する項目により構成されている。第6因子（5項目）は，「お金の利用

と処世術」と命名されており，「商売や事業をするには，借金は必要な行為である（項目24）」「お金を貯めるのは使うためであり，貯めるだけでは意味がない（項目45）」といった，お金に直接関係のない項目により構成されている。各下位尺度のα係数は.85～.52であり，高いとはいえない部分がある。また，項目を参照すると，お金自体への評価やイメージに関する項目だけでなく，お金にかかわる時の人間の性質に対する考えや，お金によって間接的に引き起こされた社会現象に言及した項目も含まれており，お金に対する態度のみを測定しているとは言いがたく，お金に対する態度の測定に用いるには適当ではないといえる。原岡（1990）の尺度の下位尺度を各側面に分類すると，お金の社会的価値と社会における諸悪の根源が認知的側面を表していると考えられる。また，金儲けと使用の楽しみは感情的側面に分類されるだろう。その他の3つの下位尺度については，お金に直接関係しないものと考えられる。

ここまで紹介した既存の尺度を概観すると，認知的側面の中には，一般的交換手段の側面や価値尺度手段の側面と関連すると考えられる2つの要素があると考えることができる。1つは，お金の影響力を評価する要素である。お金の影響力を強く認識しているかどうかによって，労働や購買などのお金に関連する行動に差が現れることが予想されるため，重要な要素といえる。また，もう1つは給料を人の能力への評価と考えるなど，お金を仕事の達成や社会的な成功の象徴をみなすといった要素である。これは，富の所有が能力の高さを表すと認識され続けた結果，富の所有自体が称賛の対象となるようになったというVeblen（1899）の考察とも整合するため，お金に対する認知の基本的な要素と考えられる。

行動的側面の中では，お金の使用と貯蓄に関する下位尺度が目立つ。特に使用に関しては，複数の尺度に含まれる勢力に関係する下位尺度に表されるように，お金を使うことによって自分を他者に対してよりよく見せるという自己呈示的な側面が強調されていることは興味深い。しかし，いずれの行動も自分のためにお金を使用するという面にしか焦点を当てていない部分に限界が感じられる。たとえば，Lim & Teo（1997）の尺度の中の不寛容下位尺度のように，募金をする，人に貸す，といった他者志向的な行動も日常場面ではしばしば見られる。お金に関連する行動は，非常に多様であることを考えると，ごくわずかな行動のみの個人差を問題にするだけでは不十分である。行動の多様さを考慮すれば，今後は行動的側面については独立した測定を行う必要もあるかもしれない。なお，勢力を認知的側面に分類した尺度もあるが，実際の行動を測定する文章になっているか，お金にはそのような効果があると考えているかを測定する文章になっているかによって異なる側面に分類した。今後は測定項目の表現を洗練していくことも必要である。

最後に，感情的側面では，心配や安心といった下位尺度が目立っていた。これは不安という要素の両極にあると考えられる。Furnham & Argyle（1998）も，「強迫性」と「心配」は多くの尺度で見出されている下位尺度であると指摘している。強迫性と心配は不安に関連するものと考えられるが，不安に関連する下位尺度はFurnham & Argyle（1998）以降に発表された尺度においても繰り返し採用されているため，この要素は重要であるといえよう。また，お金は社会的なネットワークを利用するための資源であるというZhou, Vohs & Baumeister（2009）の指摘からも，お金が不安と関連していることは納得できる。しかし，感情的側面には，お金そのものに対して持っている基礎段階での感情と，お金を使う行動をした場合に何らかの感情になるといった反応性の感情が混在している部分もある。今後は，こうした感情を区別して捉えることが望ましいだろう。

また，尺度全体において，これまでの研究では社会的望ましさについての配慮が行われてこなかった。しかし，お金が従来からタブーと考えられてきたことは周知のことであり，今後は配慮を行っていくべきであるだろう。

さらに，尺度全体として，文化差の要因が排除できない。MBBSはイギリス，MASとMESはアメリカで作られた尺度であるが，その後様々な国や文化において新たな調査が行われている。たとえばメキシコにおいてMASを実施したRoberts & Sepulveda（1999）では，Yamauchi & Templer（1982）より1因子多い5因子が得られている。また，Tang, Furnham & Davis（2002）は，台湾，アメリカ，イギリスに住む合計308人を対象にMES6項目版を用いて調査を行っているが，想定した因子構造が確認的因子分析によって支持されたのはアメリカのみであった。これらを考慮すると，Tang（1993）やFurnham & Argyle（1998）でも指摘されている通り，お金に対する態度を測定する際には文化の影響を考慮する必要があると考えられる。そのため，今後日本においては独自の尺度を作成することが望まれる。

お金に対する態度と関連のある変数

お金に対する態度と関連のある場面として，就業

場面と購買場面の研究が進んでいる。就業場面では，MESが用いられることが多く，購買場面ではMASやMBBSが用いられることが多い。以下，順に紹介していく。

就業場面での関連研究

就業場面でのお金に対する態度の研究は比較的多い。研究は特に，就業状態に焦点を当てたものと，就業中の何らかの行動に焦点を当てたものに大別できる。調査には，MESや，MESを基にして作られたLOMが多く使われている。

まず，就業者の就業状態や職務継続についての研究を紹介する。Tang & Gilbert（1995）は，福祉施設職員を対象にした調査を行い，MESの下位尺度の善と節約，自由・勢力が内的な職業満足感と正の相関を示し，悪が負の相関を示したと報告している。また，外的な職業満足感とは，善が正，悪が負の有意な相関を示していた。これらのことから，お金をポジティブなものと捉えているほど職業満足感が高く，お金をネガティブなものと捉えているほど職業満足感が低いといえる。福祉施設職員への調査では，MESと内的な職業満足感が，18ヵ月後にも職を継続しているかどうかを予測することが明らかになっている（Tang, Kim & Tang, 2000）。さらに，LOMが，実際の収入とともに，Quality of Lifeに有意な影響を与えていた（Tang, 2007）。このように，お金に対する態度は働く人の精神的健康と関連しているとともに，職務の継続に関連していると考えられる。

しかし，就業状態はMESによって判別することができないという研究もある。たとえば，Tang, Kim & Tang（2002）は，大学生の就業状態をMESによって判別することを試みたが，年齢や教育水準といったデモグラフィックな変数に加え，職業倫理，タイプA特性，人生に対する満足感が，フルタイム就業者，パートタイム就業の大学生，就業していない大学生の3群を判別する際に有効であったのに対し，MESの下位尺度は判別に有効ではなかった。しかし，この結果は，大学生の就業状態という特殊な就業状態の判別であるので，一般の就業者でも同様の結果になるとは限らない。一般の就業者を対象にした調査が望まれる。

生活保護受給者の就業状態の研究も行われている。Tang & Smith-Brandon（2001）は，生活保護を受けている人および生活保護を受けていたことのある人に対して調査を行った。その結果，現在生活保護を受けている「生活保護群」，生活保護を受けながら職業訓練を受けている「職業訓練群」，かつて生活保護を受けていたが現在は職に就き生活保護を受けていない「再就職群」の3群において，MESの下位尺度得点に差が見られた。再就職群では，善，尊敬・自尊心，自由・勢力，節約の得点が高く，悪の得点が低かった。一方で，生活保護群では，悪の得点が高く，善，尊敬・自尊，自由・勢力，節約の得点が低かった。達成に関しては，3群で差が見られなかった。お金に対する態度は，就業状態や収入の有無によっても異なるといえる。

以上から，認知的側面と行動的側面が就業状態と関連している可能性が高いといえる。しかし，MESに含まれる行動的側面は，節約に関するものだけであり，お金に関係する行動として考えられるものの中でもごく限られたものとなっている。よって今後は，節約以外の行動的側面と就業状態の関連を検討する必要がある。また，MESには感情的側面に該当する下位尺度がないため，感情的側面と就業状態の関連は明らかになっていない。その点も今後の研究課題といえるだろう。

お金に対する態度は就業場面での精神的健康と関連しているが，さらに，給与に関する認知との関連も示されている。MES得点の高い男性はMES得点の低い男性と比べ，自分よりも地位の高い相手にはより多くの給与を配分し，自分よりも地位の低い相手にはより少ない給与を配分しようとする傾向があった（Tang, 1996）。このことは，お金に対する態度の違いによって適正と感じられる給与のレベルに差があることを示唆している。お金に対する態度という観点から労働環境の整備について考えることも有効かもしれない。

次に，就業場面での行動とお金に対する態度の関連に焦点を当てた研究を紹介する。

まず，職務中の非倫理的行為との関連について見ていく。非倫理的行為とは，職場の商品を自分の物にする，会社の備品を私的に使用するといった行為であるが，香港のビジネスマンを対象とした調査では，LOMの得点が非倫理的行為と有意な正の関連を示した。その一方で，収入と非倫理的行為の関連は，LOMと非倫理的行為の関連よりも絶対値の小さい弱い負の関連であった（Tang & Chiu, 2003）。これは，実際にどれだけの額を給与として受け取っているかよりも，お金に対してどう考えたり感じたりしているかの方が非倫理的行為と強く関連するということを示唆する結果であり，非常に興味深い。

お金に対する態度と就業場面での援助行動の関連を検討した研究もある。Tang, Sutarso, Davis, Dolinski, Ibrahim & Wagner（2008）では，援助行動に対する内的な動機づけと実際の援助行動に正の関連がある一方で，LOMと援助行動に対する外的な動機づけには正の関連があり，外的な動機づけと

実際の援助行動には負の関連があるというモデルが示されている。これは，LOMの得点が高い場合には，間接的に職場における他者への援助行動が抑制されることを示している。お金に対する態度が，お金に関係ない行動を抑制してしまうというこの結果も非常に興味深い。

就業中の行動との関連では，お金に対する態度の各下位尺度の結果よりも全体との関連が重視されてきた傾向にあるため，今後はより詳細な検討が望まれる。また，お金にこだわった結果，援助行動のようなお金をもたらさない行動が抑制されてしまうという現象については，就業場面以外でも起こりうるのか検討することも必要であろう。

最後に，労働と関連した大規模研究を紹介する。MBBSの一部を用いて，42の国に住む約14,000人に対して調査を行った一連の研究では，MBBSの得点がGDP（国内総生産）と中程度の有意な負の相関を示すこと，MBBSの得点がGDPを有意に予測すること（Furnham, Kirkacaldy & Lynn, 1994: Furnham, Kirkcaldy & Lynn, 1996）が明らかになっている。国際比較の研究ではあるが，お金に対する個人の態度が労働意欲や生産性に影響を与えた結果，GDPと関連を示す可能性も考えられることから，お金に対する態度の個人差について考える場合にも有益な視点であるだろう。

購買場面での関連研究

お金に対する態度は，過剰な買い物行動やクレジットカードの所有などとも関連がある。

たとえば，Hanley & Wilhelm（1992）では，強迫的に買い物をする人々は，そうではない人々と比べて，MBBSの下位尺度の中でも，強迫性，勢力･名声，保存，不足の得点が有意に高く，安心・保守的の得点が有意に低いことが明らかになっている。また，Roberts & Jones（2001）は，MASの下位尺度の勢力・名声と不安が大学生の強迫的な買い物行動およびクレジットカードの使用と正の相関を示したことを報告している。クレジットカードの利用に問題のある人は，問題のない人に比べてMASの下位尺度の勢力・名声と不安の得点が高く，保存・時間の得点が低いという報告もある（Tokunaga, 1993）。これらの研究では，不適応的な買い物行動やクレジットカードにおける問題といったお金の使い過ぎに関する問題と不安感との一貫した関連が示されている。今後は，不安感がお金の使い過ぎに関する問題の原因であるのか確かめる必要があるだろう。

また，クレジットカードの所有との関連としては，Hayhoe, Leach & Turner（1999）が行った，大学生のクレジットカードの所有とお金に対する態度の研究が挙げられる。調査では，クレジットカードを持っていない大学生は，カードを持っている大学生に比べ，MBBSの下位尺度の強迫性と保存の得点が高いことが明らかになった。また，クレジットカードを4枚以上持っている大学生は，カードを1～3枚持っている大学生に比べ，努力・能力の得点が高いことも明らかになった。クレジットカードの保有枚数でも，過剰な買い物行動と同じく，感情的側面に特徴が見られる。クレジットカードの保有に関しては，ポイントや優遇などの特典のためにカードを作るということも考えられるので，お金に対する態度との直接的な関連のみを指摘するには慎重さを要すると考えられるが，不安感のような感情的側面との関連には注目すべきものがある。

さらに，お金に対する態度は，消費者の倫理的信念（consumer ethical beliefs）と関連することも明らかになっている。LOMの得点が高く，お金に対して積極的な考えを持っているほど，軽度の非倫理的行動（レジでおつりを多く受け取っても黙っておく，期限切れの割引券を使うなど）を受容する度合いが高くなることが明らかになっている（Vitell, Singh & Paolillo, 2007: Vitell, Paolillo & Singh, 2006）。

以上から，購買場面における行動は，お金に対する態度の感情的側面の中でも，特に不安感と関連が強いことがうかがわれる。しかし，関連が示されているだけであるので，今後は因果に言及するための研究が望まれる。また，消費者の非倫理的な行動では，お金に対するポジティブな態度が関連していることが示されている。しかし，非倫理的な行動に関しては研究数が少ないため，今後の研究が期待される。

お金に対する態度の規定因

ここまで見てきたように，お金に対する態度は，様々な場面での行動と関連している。では，お金に対する態度に影響を与えていると考えられる要因にはどのようなものがあるのであろうか。

お金に対する態度とパーソナリティの関連としては，競争性が高いほどお金の重要性を強く認知していること（Kirkcaldy & Furnham, 1993）や，LOMの得点とマキャベリアニズムが正の関連を示すこと（Tang & Chen, 2008）などが報告されている。

他にも，欲求との関連を検討した研究も存在する。たとえば，Oleson（2004）では，Lim & Teo（1997）の作成した尺度とマズローの欲求階層説の関連を検討している。その結果，大学生においては，お金に

対する態度は欲求の各階層と関連していたが，特に下位尺度の評価と不安が各欲求と強く結びついていた。また，類型的な方法を用いた研究もある。Tang, Tang & Luna-Arocas（2005）では，LOMを用いて調査を行い，大学生をクラスター分析で群に分けた結果，お金をよくないものと思っている「お金嫌悪群」，お金にあまり高い価値をおいていないが管理はしっかり行っている「無関心群」，管理が甘い「不注意群」，お金に対する評価が高い「お金崇拝群」の4群が見出された。そして，お金嫌悪群はマズローの欲求階層説に含まれる欲求が満たされていると感じる程度が全般的に低い一方で，お金崇拝群は欲求が満たされていると感じる程度が全般的に高いことが明らかになった。これらの結果からは，欲求とお金に対する態度の関連が一貫して示されているといえるだろう。

さらに，宗教や思想との関連も示されている。Wong（2008）はマレーシアのキリスト教徒のビジネスマンに対し，お金に対する態度と宗教的な活動の頻度などを尋ねる調査を行った。クラスター分析の結果，LOMの下位尺度の成功と動機づけの得点が高いことが特徴の「お金で成功している群」，成功の得点が低く，節約の得点が高いことが特徴の「注意深くお金を管理する群」，節約と動機づけの得点が低いことが特徴の「お金に対して無気力な群」が見出され，3群の間には信仰活動の程度に差が見られ，信仰活動の頻度が高いほどお金に対して慎重になる傾向が見られた。また，Tang（1992）では，プロテスタント的職業倫理観（Protestant Work Ethic）とMESの下位尺度の悪が正の関連を示していた。このように，お金に対する態度は宗教や思想と関連を示す傾向にある。

お金に対する態度の規定因は，下位尺度ごとの検討が少なく，全体としての検討が多いため，今後は下位尺度ごとの検討も望まれる。また，欲求や思想といった特徴との関連を指摘するにとどまっている点にも限界が感じられる。近年，後述のように，家庭でのしつけや学校での金銭教育の重要性が盛んに指摘されていることを考慮すると，それらによってお金に対する態度がどの程度影響を受けるのか検討することも重要であろう。

日本におけるお金に関する研究の現状と展望

ここまでは，海外で行われたお金に対する態度の研究を中心に紹介してきた。以降では，日本における周辺的研究を紹介し，今後の課題と展望について言及する。

日本における周辺的研究

これまで見てきたように，海外においてはお金に対する態度の研究が数多くある一方で，日本においての研究は原岡（1990）しかないのが現状である。しかし，お金に対する態度以外のお金に関連する研究は多数散見される。以下，調査協力者の属性別に紹介する。

まず，小学生を対象とした調査を紹介する。小学生を対象とした調査には，金銭管理と家庭教育の実態把握を行った深田・福（1982），金銭感覚と消費態度について検討した渡邊・岸（2006）などがある。いずれも，お金をどのように使っているかなどの具体的項目を尋ねる実態把握調査となっている。

次に，高校生を対象とした調査を紹介する。高校生では，経済的自立に対する意識を調査したものが多い。望月・中島・大根田（1992）が高校生および大学生を対象として行った，規範に関する調査には，「経済的に自立する」という項目が含まれていたが，この項目への承認率は90％を超えていた。家庭科教育の領域においても，志村・佐藤（2003）によって高校生を対象として経済的自立に関する調査が行われており，高校生の経済的自立に対する意識の高さが示されている。

大学生においては，経済意識に注目した研究が行われている。経済意識に関しては具体的な定義が見当たらないが，お金に関する行動や親への金銭的な依存の程度を尋ねる項目によって測定されている。篠原・原崎（2002）では，甘えと経済意識には部分的に関連があることが示された。また，篠原・原崎（2004）においても同様の傾向が示された。これらの研究からは，社会に出てお金を自分の責任で使いこなしていく前段階としての青年期に対する注目の高さがうかがえる。

また，お金の理解の発達に関する研究としては岡野（1992）が，幼児から高校生までを対象にした調査を行っている。調査からは，お金の理解が年齢とともに具体性の高いものから抽象性の高いものに移行していくことが明らかにされている。また，金銭の有効性の認知に焦点を当てた明石（1977）では，金銭の有効性の認知が，学校段階が上がるにつれて下がっていく様子が示されている。さらに，小中高校生を対象に調査を行った竹尾・高橋・山本・サトウ・片・呉（2009）でも，具体的なお金のやりとりの行動やお金に関連する規範の認識が，学校段階によって異なることが示されている。

以上のように，日本におけるお金に関する心理学的研究としては，小学生における実態調査，高校生や大学生を対象とした経済的自立に関する調査，そ

して学校段階による差異を扱った調査があるといえる。いずれも成人を対象としたものではない他，個人差を扱ったものもほとんど見当たらないため，今後はそのような観点からの研究が望まれる。

日本における今後の課題と展望

前述のように，日本におけるお金に関する心理学的研究では，具体的なお金の使い方ややりとりを扱ったものや，経済的自立など間接的な意識を扱ったものが多い。しかし，現在のように，成人期以降の金銭トラブルを未然に防ぐことを目的とした，成人や児童に対する金銭教育が重要視されつつある中においては（宮坂，2008；金融広報中央委員会，2006），個人差の観点からの知見が必要とされるようになってくるものと考えられる。なぜなら，なぜ同様の経済水準にあっても，借金をする人がいる一方で，借金をせずに済む人がいるのかといった問いに対しては，個人差の観点から説明することが有用であると考えられるためである。また，成人を対象とした金銭教育のためには，より年齢が上の層にも応用できる知見が必要であろう。よって今後はより広い年齢を研究対象としていくことも必要であろう。

また，労働や消費で見られる近年の新たな問題についても，お金に対する態度の研究から知見を提供することが可能と考えられる。たとえば，労働意欲が低下する理由として，内田（2007）は賃金を能力の評価として考えすぎることを一因として挙げているが，この点についてはお金に対する態度の中でも認知的側面からアプローチすることが可能かもしれない。また，現在の若者は以前の世代とは異なり，消費に積極的ではなくなってきていると指摘されており，今後の日本経済のあり方が，これまでとは変わってくるとも言われている（山岡，2009）。このような新しい局面に対しても，お金に対する態度の観点からの検討が可能であろう。いずれの場合においても，お金に対する個人差を問題とすることは有効なことであるといえるため，広く研究を進める必要があるであろう。

さらに，お金に対する態度と対人行動についての研究も望まれる。人とのかかわりは，お金とのかかわり同様，生活の多くを占めており，時には貸し借りやおごりのように，お金に対する行動と対人行動が同時に行われる場合もある。お金とのかかわりを包括的に捉えるためにも，研究領域の拡大が望まれる。

謝　辞

本論文に対し有益なアドバイスをくださった目白大学の今野裕之先生と，筑波大学の葉山大地さんにこころから感謝いたします。

引用文献

明石要一（1977）．子どもの金銭観の研究―金銭の有効性感覚を手がかりとして―　千葉大学教育学部紀要，**26**，59-70.

Baker, P.M. & Hagedorn, R.B. (2008). Attitudes to money in a random sample of adults: Factor analysis of the MAS and MBBS scales, and correlations with demographic variables. *The Journal of Socio-Economics*, **37**, 1803-1814.

深田貞子・福知栄子（1982）．児童の金銭感覚と家庭教育に関する一考察　岡山大学教育学部研究集録，**60**，111-126.

Furnham, A. (1984). Many sides of the coin: The psychology of money usage. *Personality and Individual Differences*, **5**, 501-509.

Furnham, A. & Argyle, M. (1998). The psychology of money. London: Routledge.

Furnham, A., Kirkcaldy, B. & Lynn, R. (1994). National attitudes to competitiveness, money, and work among young people: First, second, and third world differences. *Human Relations*, **47**, 119-132.

Furnham, A., Kirkcaldy, B. & Lynn, R. (1996). Attitudinal correlates of national wealth. *Personality and Individual Differences*, **21**, 345-353.

Hanley, A. & Wilhelm, M.S. (1992). Compulsive buying: An exploration into self-esteem and money attitudes. *Journal of Economic Psychology*, **13**, 5-18.

原岡一馬（1990）．お金に対する態度と価値志向Ⅰ―態度の構造と態度尺度の構成―　名古屋大學教育學部紀要教育心理学科，**37**，199-216.

林　敏彦（2008）．7章お金と金融 改訂版経済学入門 放送大学教育振興会.

Hayhoe, C.R., Leach, L. & Turner, P.R. (1999). Discriminating the number of credit cards held by college students using credit and money attitudes. *Journal of Economic Psychology*, **20**, 643-656.

片平光昭（2003）．第12章貨幣市場と利子率の関係

を考えてみよう 長谷川啓之・太田辰幸・関谷喜三郎・片平光昭・安田武彦（共著）初心者のための経済学 創土社.

金融広報中央委員会（2006）. 金融に関する消費者教育の推進に当たっての指針（2002）金融広報中央委員会.

Kirkcaldy, B. & Furnham, A. (1993). Predictors of beliefs about money. *Psychological Reports*, **73**, 1079-1082.

Lim, V.K.G. & Teo, T.S.H. (1997). Sex, money and financial hardship: An empirical study of attitudes towards money among undergraduates in Singapore. *Journal of Economic Psychology*, **18**, 369-386.

Mitchell, T.R. & Mickel, A.E. (1999). The meaning of money: An individual-difference perspective. *Academy of Management Review*, **24**, 568-578.

宮坂広作（2008）. 金銭教育が切り拓くもの（特集1・子どもの金銭教育）教育と医学, **56**, 604-611.

望月葉子・中島史明・大根田充男（1992）. 年齢規範の観点からみた青年の将来展望に関する研究—予期された標準的なライフサイクルと職業生活設計をめぐって— 発達心理学研究, **3**, 81-89.

岡野雅子（1992）. 子どもの金銭感覚の発達（第1報）消費者教育のための基礎的研究 日本家政学会誌, **43**, 745-758.

Oleson, M. (2004). Exploring the relationship between money attitudes and Maslow's hierarchy of needs. *International Journal of Consumer Studies*, **28**, 83-92.

Roberts, J.A. & Jones, E. (2001). Money attitudes, credit card use, and compulsive buying among American college students. *Journal of Consumer Affairs*, **35**, 213-240.

Roberts, J.A. & Sepulveda, C.J.M.(1999). Demographics and money attitudes: a test of Yamauchi & Templer's (1982) money attitude scale in Mexico. *Personality and Individual Differences*, **27**, 19-35.

Rose, G.M. & Orr, L.M. (2007). Measuring and exploring symbolic money meanings. *Psychology & Marketing*, **24**, 743-761.

志村結美・佐藤文子（2003）. 家庭科における自己実現と経済的自立に関する教育内容の探求—高校生の認識と実態の視点から— 日本家庭科教育学会誌, **46**, 14-26.

篠原しのぶ・原崎聖子（2002）. 青年の甘えと社会的適応に関する発達心理学的調査 福岡女学院大学紀要：人間関係学部編, **3**, 61-69.

篠原しのぶ・原崎聖子（2004）. 青年の甘えの背景に関する調査研究 福岡女学院大学大学院紀要：臨床心理学, **1**, 9-20.

竹尾和子・高橋 登・山本登志哉・サトウタツヤ・片成男・呉 宣児（2009）. お金の文化的媒介機能から捉えた親子関係の発達的変化 発達心理学研究, **20**, 406-418.

Tang, T.L.P. (1992). The meaning of money revisited. *Journal of Organizational Behavior*, **13**, 197-202.

Tang, T.L.P. (1993). The meaning of money: Extension and exploration of the money ethic scale in a sample of university students in Taiwan. *Journal of Organizational Behavior*, **14**, 93-99.

Tang, T.L.P. (1995). The development of a short money ethic scale: Attitudes toward money and pay satisfaction revisited. *Personality and Individual Difference*, **19**, 809-816.

Tang, T.L.P. (1996). Pay differentials as a function of rater's sex, money ethic, and job incumbent's sex: A test of the Matthew effect. *Journal of Economic Psychology*, **17**, 127-144.

Tang, T.L.P. (2007). Income and quality of life: Does the love of money make a difference? *Journal of Business Ethics*, **72**, 375-393.

Tang, T.L.P. & Chen, Y.J. (2008). Intelligence vs. wisdom: The love of money, machiavellianism, and unethical behavior across college major and gender. *Journal of Business Ethics*, **82**, 1-26.

Tang, T.L.P. & Chiu, R.K. (2003). Income, money ethic, pay satisfaction, commitment, and unethical behavior: Is the love of money the root of evil for Hong Kong employees? *Journal of Business Ethics*, **46**, 13-30.

Tang, T.L.P., Furnham, A. & Davis, G.M.W. (2002). The meaning of money: The money ethic endorsement and work-related attitudes in Taiwan, the USA and the UK. *Journal of Managerial Psychology*, **17**, 542-563.

Tang, T.L.P. & Gilbert, P.R. (1995). Attitudes toward money as related to intrinsic and extrinsic job satisfaction, stress and work-related attitudes. *Personality and Individual Differences*, **19**, 327-332.

Tang, T.L.P., Kim, J.K. & Tang, T.L.N. (2002).

Endorsement of the money ethic, income, and life satisfaction: A comparison of full-time employees, part-time employees, and non-employed university students. *Journal of Managerial Psychology*, **17**, 442-467.

Tang, T.L.P., Kim, J.K. & Tang, D.S.H. (2000). Does attitude toward money moderate the relationship between intrinsic job satisfaction and voluntary turnover? *Human Relations*, **53**, 213-245.

Tang, T. L. P., Tang, D.S.H. & Luna-Arocas, R. (2005). Money profiles: The love of money, attitudes, and needs. *Personnel Review*, **34**, 603-618.

Tang, T.L.P. & Smith-Brandon, V.L. (2001). From welfare to work: The endorsement of the money ethic and and the work ethic among welfare recipients, welfare recipients in training programs, and employed past welfare recipients. *Public Personnel Management*, **30**, 241-259.

Tang, T.L.P., Sutarso, T., Daivis, G.M.T.W., Dolinski, D., Ibrahim, A. H.S. & Wagner, S.L. (2008). To help or not to help? The good Smaritan effect and the love of money on helping behavior. *Journal of Business Ethics*, **82**, 865-887.

Tokunaga, H. (1993). The use and abuse of consumer credit: Application of psychological theory and research. *Journal of Economic Psychology*, **14**, 285-316.

内田　樹（2007）．下流志向：学ばない子どもたち働かない若者たち　講談社.

Veblen, T. (1899). The theory of leisure class.（小原敬士訳．有閑階級の理論．岩波書店）

Vitell, S.J., Paolillp, J.G.P. & Singh, J.J. (2006). The role of money and religiosity in determining consumers' ethical beliefs. *Journal of Business Ethics*, **64**, 117-124.

Vitell, S.J., Singh, J.J. & Paollillo, J. (2007). Consumers' ethical beliefs: The roles of money, religiosity and attitude toward business. *Journal of Business Ethics*, **73**, 369-379.

渡邊彩子・岸　麻美（2006）．小学生の金銭感覚と消費態度　群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育・生活科学編，**41**，179-190.

Wong, H.M. (2008). Religiousness, love of money, and ethical attitudes of Malaysian evangelical Christians in business. *Journal of Business Ethics*, **81**, 169-191.

山岡　拓（2009）．欲しがらない若者たち　日本経済新聞出版社.

Yamauchi, K.T. & Templer, D.I. (1982). The Development of a Money Attitude Scale. *Journal of Personality Assessment*, **46**, 522-528.

Zhou, X., Vhos, K.D. & Baumeister, R.F. (2009). The symbolic power of money: Reminders of money alter social distress and physical pain. *Psychological Science*, **20**, 700-706.

（受稿 3 月 23 日：受理 4 月 30 日）